日本アカデミー賞に期待する

●出席者（敬称略）


秋山庄太郎 写真家


落合恵子 エッセイスト




中西啓介 衆議院議員


三浦大四郎 文芸坐社長

（五十音順）


（司会）
今野雄二 音楽評論家

映画のヒーローと子供の遊びの世界は切り離せない

今野　それでは「我ら映画ファンとして〝日本アカデミー賞〟に期待する」というテーマでお話しいただきたいと思いますけれども、みなさんの一番最初の映画との出会いを覚えていらっしゃいますか。

落合　私は、東映の時代劇ですね。波の砕けるのを見て、ふるえるような思いをしたことがあります。

今野　錦之助、千代之介ですね。

落合　ええ、そのころですね。少しあとに大川橋蔵とか……。いつも祖母と一緒でして……。映画ファンには非常に申し訳けないのですけれども、お菓子を持ってガサゴソと……それ以前も、 嵐寛 さんの鞍馬天狗……、ぼんやりと覚えております。当時は、映画のヒーローが自分たちの遊びのヒーローになったり、そういう意味で映画がとても身近かにあったような気がします。どの町にも原っぱがあって、その原っぱでチャンバラごっことか。

中西　ぼくは16年前なんですよ。ジョニー・ワイズミュラーのターザンという映画を見たのが一番強烈な印象として残っていますね。そのころはターザンを見たら公園の中でみんなで小屋をつくって遊んだりとか、映画と子供の遊びの世界とは切り離せない、そんな印象ですね。

三浦　私は映画の出会いといいますと、小学校のときですね。昭和10年ころ、大都映画というのがありました。他はみんなトーキーなのにまだ無声映画で、これはチャンバラ、アクションオンリーで、だいたい３本立てから４本立てになっているんですね。たいへんおもしろく夢中になりまして親の目を盗んで行くようになったわけなんです。

今野　その大都映画というのはスターがいたわけですか。

秋山　近衛十四郎さんなんかそうですね。

三浦　シナ事変が始まって一部トーキーになりましたけれど、これはまさに活動写真の原点なんですよね。

秋山　ぼくもずいぶん小さいときからですね。尾上松之助とか、市川百之助とか、そのころからぼくは下町に育ったんで、八丁堀の活動写真の小屋に何回か行った記憶があります。小学校３年のころ中目黒に目黒館というのがあり、入場料５銭でだいたい３本立てでした。ぼくの一番最初に物語を少し覚えているという映画は、原節子さんが16才で初めて出た映画なんです。「ためらふ勿れ若人よ」という中学生が文房具屋の娘にほのかな思慕を寄せるというような、まことに甘い映画でそのときの原節子のきれいさというのはぼくには非常に衝撃だったですよ。

今野　子供のときから映画が好きだったということが、写真をやることに直接結びついたんですか。

秋山　ぼくは学生時代から写真をやっていましたから、映画というのは非常に写真に関係があって写真がうまくなるんじゃないか、という錯覚をもって見ましたね。(笑い)

今野　ああいう人を撮ってみたいとか……。

秋山　どうも、原節子に関係がありそうだ(笑い)

主人公よりも強そうな悪役が好きだった

今野　アイドルにファンレターを書いた思い出なんかおありですか。

落合　私は書いたことがあるんです。高校のころ「ウェストサイドストーリー」を見て、ジョージ・チャキリスのダイナミックな踊りにすごいショックを受けて書きました。今、思うと照れくさいのですが、一生懸命和英で引きまして書いたんですが、ご本人じゃなくてお父さまから返事がきました。

今野　お父さんが返事をくれるなんてすばらしいですね。

落合　当時は宝ものでした。だれにも見せない、でも誰かに見せたいという気持で……。

中西　ぼくがファンらしいファンになったのは、中学校のときマーロン・ブランドの「波止場」の映画を見てからですね。

秋山　ぼくは中学のとき剣道をやっていたせいか月形龍之介が好きなんです。あの人が出てくるとたいてい悪役なんですけど、どうしても主人公より強そうに見えてどうしようもない、うまかったんですよね。

落合　重厚なキャラクターの人でしたね。

今野　普段みなさんは映画をどのように見られていますか。

秋山　ぼくはわりあい映画を見るほうです。ただよく寝ますけどね。(笑い)
非常に写真にかかわりのあるような、いい場面の多い映画はどうしても寝ていられない。

今野　自分の仕事と映画を結びつけて、意識的に見るなんていうことはありますか。

落合　私は一映画ファンとして自分の感性だけで見たいと思いますから、仕事に役立つかどうかというのはあとの問題で、映画館の入口をくぐったときは一人のファンということで……、そうありたいという願望でもありますけれど……。

中西　ぼくも映画を見て、たまたまこういう生き方をしたいなとか、こういう男の生きる道というのはいいななんてあとで思いますけれど、あくまでも一人でのんびりと映画でも見たいなという気持で行きます。ですから一緒に行って見るのは好きじゃないですね。一人で没頭したいですね。



仕事の合間にでも とにかく映画館に入って見た

今野　いまの日本映画の現状をお聞きしたいんですけれど、最近の日本映画はおもしろいと思いますか。

秋山　おもしろいものもありますね。撮影技術とかそういうものを含めて技術的にとっても進歩しましたよね。ですからぼくはわりあいとおもしろいと思いますよ。

中西　テレビにある程度抵抗して、それに打ち勝たなければという工夫も見られるし、最近また映画が相当脚光を浴びてきたんじゃないですかね。

三浦　いまみなさんが最近の映画はたいへんおもしろいと言われましたが、実は私もそう思っているんです。映画はつまんないから見ないとおっしゃる方が多いんですが、最近の映画を観てくださいと言うんですよ。最近の映画のほうが昔よりもっとおもしろい。お金はかかってますし、日本だけでなく外国でもともかくお客を入れようと一生懸命工夫してつくっていますからね。

今野　最近のお客さまはどうですか。

三浦　最近の若い人は生まれたときからテレビがあるわけですから、非常に映像感覚が鋭いんですね。テレビで映画を見て、映画は非常におもしろいというんで映画館に行ってみようかという人が多いですね。しかし、全体的に映画人口は減っています。１年間で映画を見る人は昭和33年がピークで11億７千万人くらいで、いまは１億７千万人を割っています。



秋山　テレビがでたちょっとあとくらいですね。

三浦　ふしぎに日本人というのは25才を過ぎると映画を見なくなっちゃうんですね。30才を過ぎるとほとんど見ませんね。

秋山　ぼくなんか60近くになってまだ見ている。（笑い）

今野　いまどのくらいのペースですか。

秋山　仕事の都合でちょっとひまがあれば、どんどん見ちゃうほうです。たとえば１時間しかなかったらスーッと入って、その次ひまがあったら残り半分を見ようかな、という感じなんです。

三浦　徳川夢声さんがやっぱりそういうことを言っていらっしゃいましたね。仕事の合い間に何でもいいから映画館に入って見て、仕事の時間がきたらすぐ出る、そうしないと見られないと。ただ私自身映画の商売をやっていながら、忙しくてなかなか映画を見るひまがないんです。（笑い）

中西　紺屋の白袴ですね。

女優に対する憧憬の念が 薄れたことはさびしいですね

今野　映画を見なくなったというのは、やっぱりテレビの影響というのが絶対あるわけですか。

三浦　テレビの影響ももちろんありますし、レジャーの多様化ということですね。昔は映画が安直な娯楽で、ほかにありませんでしたけれど、いまは若いお嬢さんでもどんどん海外旅行に行くような時代ですから。

秋山　あんまり情報文化が高度に発達すると、出てくる女優さんなんかに対する憧憬の念が薄れてくるんですよ。昔はテレビもないから、映画に行かなければ見れないわけですよね。あとは雑誌しか…。それも少数しか見れない。いまはどこへ行ったって雑誌は氾濫ですからみんな見ちゃうわけです。しかも結婚したとか離婚したとか出ちゃうから、憧れというものはなくなっちゃうでしょうね。

落合　本当にそうですね。垣根越しに、すぐ話しかけられるといったイメージですもの。

今野　テレビでしょっちゅういろんなスターが出

てきて、もう魅力というものに麻痺しているでしょう。あんまり露出されているということで、何かサムシングがあり得るとは考えられなくなっちゃうんですね。

落合　かつて私が「映画の友」とか「スクリーン」を見ていたころというのは、俳優さんを謎のベールで美しく美しくと撮っていましたよね。最近はその一つの反動として、素顔と地でもって勝負してますでしょう。しかも、事前にすべてストーリーが知らされちゃうしで、そういう意味でこちらが夢をかける部分がだんだん削り取られてきた。空想の余地が少なくなってきたという、そういうさびしさがありますね。だからスターがいなくて、タレントさんが大勢いる、という感じになってしまう。

中西　とにかく、みんなが人間的に感激性がなくなってきているんじゃないですか。

今野　さきほどお話しのあった映画を見る人のピークが昭和33年、テレビが出たあとということですが、当時はどんな映画がありましたか。

三浦　「隠し砦の三悪人」とか「陽のあたる坂道」。裕次郎の全盛時代ですね。裕次郎が最後の映画スターだと言われています。以後、テレビからしかスターが生まれない。

秋山　東映のヤクザ映画が非常に盛んなころ、藤純子、高倉健なんていうのはテレビに出ませんでしたよ。そうすると、やっぱりみんな新鮮ですよ。藤純子の緋牡丹お竜なんかあのワンカットだけで帰ってきちゃったことがあるんだけど、なかなかいいんですよね。やっぱりほんとうのスターというのはあまりテレビに出ちゃいけない。

今野　アメリカの大スターではいまだにがんこに絶対テレビはいやだ、インタビューでもいやだ、という人がいますね。

映画ファンは口コミの一員として頑張らねば



秋山　ぼくは映画をわりあい見ているほうなのでだれ彼となく、いま何がおもしろいか聞かれるんですよね。そのときとても困っちゃうのね。それで、ぼくはいまやっていなくても寅さんがいいよと言うんですよ。ちょっと気取った人はいやがるんですが、見てからにしろと言ってぼくはすすめるんですよ。

中西　あれはおもしろいですね。

秋山　見るとみんな感激して帰ってくるんだけどなかなか抵抗があって、ああいう庶民的な映画は見ない。だから映画のファンの人はおもしろいおもしろいと言って口コミの一員にならなきゃいけませんね。名古屋では口コミでいい芝居だというわさが流れるとその芝居は当たるんですよ。名古屋人は活字を信用しないで見てきた人に聞くんです。それで、それがいいと言うと絶対行っちゃうんですね。それがほんとうですからね。だから、ぼくはだれかに聞かれると寅さんがいいよと言う、できれば2本立てを見てこいと……。

三浦　まさに国民的映画ですね。(笑い)

今野　それとおもしろいのは、最近つまんないつまんないと口コミで伝わっていながら、話題性に引きづられて見るんですね。

秋山　原作を先に読んじゃうと、みんなつまんないと言うんですね。



今野　どんな映画でも宿命ですね。

秋山　原作は読みながら想像力がありますから、やっぱりおもしろいですけど、映画になると原作と違う、あそこのところはよく描けてないとか比較するからつまんなくなっちゃう。だから映画を見たら原作を読まないほうがいいかもしれない。

落合　やはり、観てから読んだ方が良いのかしら(笑い)

映画人の情熱をはぐくむ一大イベントに

今野　いままでいろんな賞がありましたけれど、日本アカデミー賞がこうやってできてみると、どうして昔からなかったのかなという気がしますね。

中西　なかったのがふしぎなくらいですね。

三浦　むしろ遅きに失したという感じですね。お祭りだからやっぱりにぎやかにやったほうがいいですよ。私自身の立場から言うと、少しでもお客さんが映画のほうに目を向けてくれるだけでもありがたいと思いますよ。

中西　映画祭が盛んなのはアメリカとフランスと日本くらいですか。

今野　そうですね。こういうお祭りがあるのもアメリカ風なんです。

秋山　一番観客動員した映画というのは賞にならないんですか。

三浦　アメリカはあるらしいですね。

秋山　ぼくはそれはとても大事だと思うんですよ。宣伝だけじゃ人は入らないと思うんです。アカデミーという語感からいうと、やっぱり大衆が参加しないとぼくはおかしいと思うんですよ。だって一番大事なのはお客さんでしょ。

中西　ぼくもその意見には大賛成だな。そうすれば映画ファンはもっとふえるんじゃないですか。

三浦　観客をどういうふうに参加させるかという方法がなかなかむずかしいですね。



秋山　映画人口が減った今でも映画を見に行く人っていうのは相当に好きなんですよ。好きなやつだけが残っている感じでしょうし、それが観客数をふやすエネルギーになるような気がしますけどね。

今野　どうせやるなら年末のレコード大賞、紅白そのへんで張り合うくらいになると、もっと全国的な盛り上りが期待できると思いますね。

落合　アメリカのアカデミー賞というのは、一般の人々がだれが賞をとるかかけたりするでしょ。本当に国民的行事といった感じで、あのくらいまでに底の層が広がりませんと、やはり遠いものという気がしますね。

中西　だから、うんとすそ野を広げないとね。

秋山　お客というのは一番正直でしょう。おもしろければおもしろいと言うし、つまんなきゃつまんないと人に言うんですから、こわいですよ。

落合　大衆の支持は必要ですけど、映画人というのはいままで余りにも恵まれなかった部分というのが一面であると思うんですよね。特に技術の方とか大道具・小道具さんとか、そういう意味では、こういうお祭りができたというのは私はすばらしいことだと思うし、それをもっと広げていただきたいなと、そんな気持もしますね。

秋山　ぼくは昔映画雑誌にいましたから、当時の技術者とか、カメラマンとか、ライトマンとかをよく知っているんですよ。ほんとうに好きでやっているんですね。映画人の情熱というのは非常にさわやかです。だから映画がもっと盛んになってもらいたいし、盛んにするためのイベントをやるんだったらば、やっぱり外部に幅を広げてほしいですね。特に大衆の力は強いから……。

落合　そうですね。それから技術賞というのがうれしいですね。従来これがだいたい抜けてますでしょう。

三浦　せっかくやるんですから、やっぱり成功するようにしていただきたいですね。

中西　むずかしいことはわかりませんが、とにかく気さくにそして楽しめるものにしていただきたいですね。

今野　日本アカデミー賞をぜひ成功させたいと思います。それではどうもありがとうございました。